

《研究報告》

## 看護総合臨床実習において成人看護領域の学生が自覚した学び —実習前の準備・実習の展開・実習のまとめのレポートより—

長内 志津子<sup>1)</sup>, 村田 千代<sup>1)</sup>

**要旨:**本研究の目的は、看護総合臨床実習において成人看護領域の学生が自覚した学びを明らかにし、今後の指導のあり方を考察することである。対象は、看護総合臨床実習を成人看護領域で行った学生4名である。学生が提出した実習前の準備・実習の展開・実習のまとめのレポートを分析した。その結果、①実習課題は、これまでの経験を背景として「看護実践能力」「対象理解（身体・心理・社会）」「自身が関心のある健康状態への看護」を挙げていた。実習目標は多側面における看護技術の修得、到達目標は評価しやすい具体的な目標を挙げていた。②実習の展開では、経験を〈学び・達成〉〈困難〉〈感じたこと〉から〈課題〉に結び付け、成長過程を自己評価していた。③実習のまとめでは、学びが〈情意領域〉〈精神運動領域〉に焦点化され、総合実習の経験を土台とした自己の成長を自覚していた。④今後は、実習前の準備から〈情意領域〉の実習課題・目標の明確化と、準備過程の自己評価が必要であることが示唆された。

**キーワード:** 看護総合臨床実習, 看護基礎教育, 自己教育力, 自己評価

### はじめに

社会情勢の変化や医療の高度化に伴い、看護職の役割は大きく変化している。看護基礎教育は基礎的能力を養うものであり、さまざまな状況の変化の中で常に社会から必要とされる看護師であるためには、卒業後も自ら主体的に、時代に応じた知識や技術を学び続けるべきであるといわれている（看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 2007, 厚生労働省ホームページ）。つまり、「自分自身で学び、成長、発展してゆける力」である自己教育力（梶田, 1985）が重要となる。田島は「臨地実習は多様なこれまでの学習内容と統合させながら、看護実践能力を身につける過程であり、自己教育力を伸ばす格好の教育単位である」（田島, 2009）としている。生涯学び続けることができる看護職者になるためには、看護基礎教育の過程で自己の目標や課題を明確にし、達成へ向かって計画的に行動するプロセスを学ぶ必要がある。

看護基礎教育課程における看護学実習を杉森らは

「学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互作用を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目指す授業である」（杉森 他, 2004）と定義している。したがって、看護基礎教育において専門的知識と技術を統合し、看護職者としての実践能力を養うためには臨地実習が不可欠である。A大学看護学部では、領域別実習終了後、看護総合臨床実習（以下総合実習）を設け、学生各々が自己の課題の達成のために自主的に実務に即した実習を行っている。この総合実習では、自己の課題の明確化、課題の達成のための実習計画立案を学生一人一人が教員の指導の下に行う。評価項目も「実習前の準備」「実習の展開」「実習のまとめ」としており、実習の展開のみならず、実習前の準備や実習後の振り返りを重視している。

領域別実習では教育側が実習の骨子を示しているが、総合実習では学生自身が作り上げていかなくてはならないため、より主体的に学ぶ姿勢が望まれる。実習の課題や目標は、本来与えられるものではなく個

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：長内志津子 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL: 0172-31-7127, FAX: 0172-31-7101, E-mail: sosanai@hirogaaku-u.ac.jp

人的なものである。自分自身の中から湧き出てきた目標・課題は行動化において重要な動機づけとなる。学生が、実習前の準備、実習の展開、実習のまとめの各時期を通して自覚した学びを明らかにし、今後の指導のあり方を考察する。

### 看護総合臨床実習（成人看護領域）の概要

総合実習の目的は「看護実践分野での実習をふまえて自己の看護の課題を明確にし、自主的に実務に即した実習を行い、看護実践に必要な知識と技術を統合的に体験する。自主的に学ぶ体験を通して、自己研修力を高め、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養う」ことである。

総合実習（成人看護領域）は、自己の実習課題の明確化・実習計画の立案・実習の打合せを行う実習前の準備、看護を実践する実習の展開、実習期間最終日の学内グループワーク・看護総合臨床実習レポート（以下実習レポート）による実習のまとめの三段階で構成されている。実習前の準備は4年前期の約3カ月間で行う。学生は、教員の指導・助言のもと、総合実習の概要および到達目標に則って自己の実習課題を明らかにし、各々が実習計画書を立案する。実習の展開は、教員の指導・助言を受け学生自身が実習施設と打合せで行う。実習期間2週間の内、施設での実習が8日間、学内実習が最終日1日（9日目）である。実習のまとめは、成人看護領域で実習した学生で「主体的に学ぶとは」をテーマとしたグループワークを行い、それぞれの学びを共有する。実習レポートは、実習の展開と実習を通しての学び・課題、看護観を記載し、実習のまとめを行う。

### 研究目的

本研究の目的は、2009（平成21）年度総合実習を成人看護領域で行った学生が、実習前の準備、実習の展開、実習のまとめの各時期に自覚した学びを明らかにし、今後の指導のあり方を考察することである。

### 研究方法

#### 1. 研究期間

2010年1月～2月

表1 看護基礎領域に必要な3領域の概要

認知領域	人間の理解と健康生活および健康問題に関する知識を中心とした、知識の習得と理解および知的諸能力の発達に関して
情意領域	対人関係および自己の成長に関する内容を中心とした、態度・興味・関心・価値観（倫理を含む）・習慣などの意思や情緒に関して
精神運動領域	看護として実践する日常生活および治療上の援助技術を中心とした、神経と筋の協調を要する一連の行動群（技術）で、実技的・技能的能力に関して

文献10)より

#### 2. 研究対象

A大学看護学部4年生のうち、研究者が2009年度総合実習（成人看護領域）で指導を担当した学生4名

#### 3. データ収集方法

研究協力依頼は、研究対象者へ文書にて行い、その後、文書および口頭にて研究の目的・方法について説明した。研究への同意が得られた学生の総合実習で提出された記録物「自己の実習課題」「実習計画書」「実習記録」「実習レポート」からデータ収集を行った。データは初めに記録物をコピーし、そのコピーした記録物に記述されている固有名詞を全て削除した後、再度コピーして得た。最初にコピーした固有名詞が記述されている記録物はただちに裁断処理した。

#### 4. 分析方法

##### 1) 実習前の準備を通しての学び

実習前の準備では、面談、グループワークを通して「自己の実習課題」の明確化、「実習計画書」の作成を行った。面談は1～2週に1回、グループワークは1カ月に1回行った。「自己の実習課題」から、総合実習の課題とその背景について記述されている内容を取り出し、カテゴリー化して分析を行った。「実習計画書」からは、総合実習の実習目標と到達目標を抜き出した。田島（2009）は「学習から生じるほとんどの行動が、認知領域、情意領域および精神運動領域の3つの領域を含んでいる」としている。そこで、実習目標と到達目標を「看護基礎教育に必要な3領域の概要(表1)」（田島，2009）を参考に〈認知領域〉〈情意領域〉〈精神運動領域〉に分類して分析した。

##### 2) 実習の展開を通しての学び

「実習記録」より、振り返りの記載部分を抜き出した。記載内容は〈学び・達成〉〈困難〉〈感じたこと〉〈課題〉に分類することができた。分類をもとに、実習経過を

ふまえ実習1週目(初日, 2~4日目)と実習2週目(5~8日目)に分けて分析した。

### 3) 実習のまとめを通しての学びと今後の課題

「実習レポート」から, 総合実習を通しての学びと今後の課題に関する記載内容を抜き出し, 「実習計画書」の実習目標・到達目標と同様に〈認知領域〉〈情意領域〉〈精神運動領域〉に分類して, 分析した。

これらの作業を研究者2名で行い, 分析内容の信頼性・妥当性を検討した。

### 5. 倫理的配慮

研究対象者には, 研究目的・方法を文書および口頭で説明し, 研究の同意を得た。研究への参加は, 自由意思であり, 断ることも可能であること, 例え研究の途中であっても研究協力を撤回できることを説明した。その際, 研究者は撤回した研究対象者の研究を直ちに中止し, 得られたデータも破棄することを説明した。また, 研究協力を断っても, 授業や成績には何ら不利益は生じないこと, 総合実習の成績評価は既になされていることも併せて説明した。研究で得られたデータは, 個人と施設が特定されないかたちで分析を行い, 本研究以外では使用しないこと, 研究が終了した時点で裁断破棄することを伝えた。研究結果は論文発表を行い, その際も個人や施設が特定されないかたちで発表することを説明した。なお, 本研究は弘前学院大学倫理委員会の審査を受けた。

## 結 果

### 1. 研究対象の背景

研究対象の学生4名は脳血管内科を有する施設で総合実習を行った。実習内容は急性期患者の看護が2名, 慢性期患者の看護が2名であった。各々の実習課題に沿って, 看護の実践では受け持ち患者を1名とした学生が2名, 受け持ち患者を2名とした学生が2名であった。学生は4名とも受け持ち患者について看護過程を展開した。

### 2. 実習前の準備を通しての学び

#### 1) 自己の実習課題

「自己の実習課題」を通して実習課題に至る背景をまとめた。背景には「これまでの実習経験」「インターシップでの経験」「身近にいる病気のある人の存在」を挙げていた。それらの背景から「患者・家族の心理面の理解不足」「患者の疾患・症状など身体面の理解

表2 自己の実習課題

カテゴリー	内容項目	件数
■対象理解(身体・心理・社会)	病態の理解	5
	気持ちの理解	
■心理的援助	不安の軽減	2
	精神的ケア	
■倫理観・対人関係	一緒に悩める関係	3
	尊重する姿勢	
■看護実践能力	個別的援助	8
	患者・家族への援助	
	病態を理解した上での援助	
■自身の関心のある健康状態への看護	患者の健康状態への関心	4
	悪化防止, 予防への援助	
	自分が将来進みたい分野	
■看護師の調整力	チームにおける看護の役割	2
	複数受持ち	

不足」「看護技術の未熟」という〈これまでの経験で達成していないと感じたこと〉と, 「主体的な看護過程の展開」「多重課題への対応」という〈経験を土台に看護学生として発展させたいこと〉が課題の動機付けとなっていた。

課題のうち共通する内容の項目をまとめ, カテゴリー化した(表2)。〈看護実践能力〉が8件と最も多く, 内容は「個別的援助」「患者・家族への援助」「病態を理解した上での援助」であった。その他, 〈対象理解(身体・心理・社会)〉は「病態の理解」「気持ちの理解」に関して5件, 〈心理的援助〉は「不安の軽減」「精神的ケア」の2件, 〈倫理観・対人関係〉は「一緒に悩める関係」「尊重する姿勢」に関して3件, 〈自身の関心のある健康状態への看護〉は「患者の健康状態への関心」「悪化防止, 予防への援助」「自分が進みたい分野」に関して4件, 〈看護師の調整力〉は「チームにおける看護の役割」「複数受持ち」の2件を挙げていた。

#### 2) 実習目標

「実習計画書」に記載されていた実習目標の件数は21件であった。学生4名全員が複数の実習目標を挙げていた。これらの実習目標を〈認知領域〉〈情意領域〉〈精

表3 実習目標

領域	内容項目	件数
■認知領域		7
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脳卒中の病理・病態を学び、患者への影響を理解する（身体的・精神的・社会的な側面から）</li> <li>・脳卒中患者の健康状態を把握し、健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できる</li> <li>・疾患の病態・生理を理解し、患者への影響がわかる</li> <li>・患者の障害や心理を理解できる</li> <li>・疼痛の日常生活への影響と、患者の気持ちを理解できる</li> <li>・麻痺側に生じている疼痛・原因を理解し、疼痛を総合的に評価することができる</li> <li>・急性状況の観察点、援助方法を理解することができる</li> </ul>	
■情意領域		2
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・援助の上で各職種役割と連携を学ぶ（チーム医療）</li> <li>・身体的・精神的な援助から結果を考察し、新たな看護の視点を持つ</li> </ul>	
■精神運動領域		12
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の意思を確認して、援助ができる</li> <li>・個人に応じた援助や観察を、根拠を持って実施することができる</li> <li>・嚥下障害にあわせた食事援助ができる</li> <li>・言語障害の状態に合わせたコミュニケーションをとることができる</li> <li>・患者の反応・行動をよく観察し、患者の欲求を察知できる</li> <li>・根拠をもって、援助を実施できる</li> <li>・患者が食事を楽しむことができるような環境をつくる</li> <li>・疼痛の原因によって疼痛緩和の援助を選択し、患者の反応を確認しながら安全に、安楽になるように援助を行うことができる</li> <li>・急性状態にある脳卒中患者の家族の心理的社会的特徴について理解し、コミュニケーションをとることができる</li> <li>・対象の状況に合わせた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できる</li> <li>・患者の家族の気持ちや思いを理解し、不安が軽減するように援助することができる</li> <li>・患者や家族の精神的特徴を学び必要な援助を考え、ケアを提供できる</li> </ul>	

神運動領域)の3つに分類した(表3)。実習目標21件の内訳は〈認知領域〉7件、〈情意領域〉2件、〈精神運動領域〉が12件で約半数を占めていた。〈認知領域〉は病態、障害、心理、生活への影響、社会的影響の理解といった「対象の理解」「疾患の理解」を挙げていた。〈情意領域〉は「関係従事者との協調」「看護の新たな視点」を挙げていた。〈精神運動領域〉は「コミュニケーション技術」、「観察技術」、「生活援助技術」、「精神的援助技術」を挙げていた。

### 3) 到達目標

「実習計画書」に記載されていた到達目標の件数は25件と、実習目標よりも多かった。25件の到達目標を〈認知領域〉〈情意領域〉〈精神運動領域〉の3つに分類した(表4)。それぞれの領域の内訳は〈認知領域〉9件、〈情意領域〉5件、〈精神運動領域〉11件であった。〈認知領域〉の到達目標は「対象理解」「症状を関連付けたアセスメント」「症状の日常生活への影響」がそれぞれ2件だった。その他、「看護技術の実践」「科学的根拠に伴った援助」「観察の上での援助」が各1件

だった。〈情意領域〉の到達目標は5件のうち4件が「患者や家族への配慮」に関する項目であった。もう1件は「チームの一員としての情報伝達や情報共有」であった。〈精神運動領域〉の到達目標は全てが「日常生活・治療上の援助技術」に関する内容であった。「根拠の理解」や「対象の個別性を反映した援助」といった認知領域と情意領域を関連させた目標が挙げられていた。

### 3. 実習の展開を通しての学び

「実習記録」に記載された振り返りを〈学び・達成〉〈困難〉〈感じたこと〉〈課題〉の内容に分類した。実習期間を通しての各項目の記載された件数は〈学び・達成〉が最も多く47件、〈困難〉は19件、〈感じたこと〉は8件、〈課題〉は33件であった。実習1週目(初日、2～4日目)と実習2週目(5～8日目)に分けて示した(表5-1、表5-2)。

実習1週目の〈学び・達成〉は20件、〈困難〉は11件、〈感じたこと〉は4件、〈課題〉は20件であった。〈学び・達成〉には、受け持ち患者の情報収集や症状の観

表4 到達目標

領域	内容項目	件数
■認知領域		9
	・対象（患者・家族）理解（身体的・心理的・社会的側面）	2
	・症状を関連付けたアセスメント	2
	・症状の日常生活への影響	2
	・疾患の理解	1
	・評価スケールを用いた症状の評価	1
	・急性期の症状と援助の根拠	1
■情意領域		5
	・意思の確認（患者の反応をみる）	1
	・肯定的な態度	1
	・対象（患者・家族）の意思尊重と、自己決定への支援	1
	・対象（患者・家族）との信頼関係構築	1
	・チームの一員としての情報伝達や情報共有	1
■精神運動領域		11
	・反応をみながら安全、安楽な援助の実践	2
	・患者の状態に合わせたコミュニケーション	2
	・家族への精神的援助	2
	・場面に応じた患者への精神的援助	2
	・看護技術の実践	1
	・科学的根拠に伴った援助	1
	・観察の上での援助	1

察、対象（患者・家族）と学生自身の信頼関係形成について記載されていた。〈困難〉については、患者とのコミュニケーションや学生自身の学習準備・積極性といった学習・実習姿勢について記載されていた。〈感じたこと〉は4件であったが、患者の言葉による喜びが挙げられていた。〈課題〉は実習に臨む態度や姿勢、受け持ち患者の観察・コミュニケーションについて記載されていた。

実習2週目の〈学び・達成〉は27件、〈困難〉は8件、〈感じたこと〉は4件、〈課題〉は13件であった。記載項目の総数は異なるが、実習1週目に比べ実習2週目は〈学び・達成〉の記載が増え、〈課題〉の記載は減っていた。〈学び・達成〉には、援助実践の達成や援助の効果について記載されていた。〈困難〉については、時間を念頭に置いた援助調整と見守ることの難しさについて記載されていた。〈感じたこと〉は全て実習8日目のみの記載であったが、充実感を挙げていた。〈課題〉は、時間を念頭に置いた援助調整や援助の実践について記載されていた。

#### 4. 実習のまとめを通しての学びと今後の課題

##### 1) 実習のまとめを通しての学び

実習を通しての学びに関する記載の総数は33件であった（表6-1）。〈認知領域〉が3件、〈情意領域〉が20件、〈精神運動領域〉が10件であった。〈学び〉に関する記載総数の半数以上を占めた〈情意領域〉の項目は、「他職種との連携・共同」「十分な説明と傾聴」「積極性」がそれぞれ3件であった。〈精神運動領域〉の項目は「個別性を踏まえた観察と看護実践」が10件中4件であった。

##### 2) 今後の課題

今後の課題に関する記載の総数は9件であった（表6-2）。〈認知領域〉は「培った観察力による判断」「予測した行動」の2件であった。〈情意領域〉は「チーム医療について学ぶ」「友人（仲間）と助け合う」「積極的に声をかける」「相手にわかるように詳しく意見を言う」の4件であった。〈精神運動領域〉は「優先順位を判断し、時間内での援助の実践」「効果の評価を見据えた教育的援助の実施」「患者の意思を確認した上での安全な援助の提供」の3件であった。

## 考 察

以上の結果をふまえ、各時期に自覚した学びを通して、今後の総合実習の指導のあり方を考察する。

##### 1. 実習前の準備

実習前の自己の実習課題の明確化を通し、「これまでの実習経験」「インターシップでの経験」「身近にいる病気のある人の存在」が挙げられていることから、実習に限らず臨床場面での経験、患者との関わりでの経験が課題を導く背景になっていることが明らかになった。また、経験の中で達成できなかった事柄や、経験したことを発展させたい事柄が新たな課題への動機づけとなっていた。これらは Knowles, M.S. が述べた成人学習者の5つの特徴（Knowles, M.S., 1984）のうち「経験が学習資源になる」「学習へのレディネスが、生活上の課題や問題から発生する」「学習への動機づけにおいて、外部から与えられる報酬や処罰よりも、内発的な要因がより重要となる」と類似する。人の生活過程へ健康面からの援助を行う看護職者は、様々な過去の学習内容を活かす必要がある。総合実習の目的の一つである「自己の課題を明確にする」ことは経験を振り返ることで達成できていたと考える。

自己の実習課題には「看護実践能力」「対象理解（身体・心理・社会）」「自身の関心のある健康状態への看

表5-1 実習の展開 (実習1週目)

	初日	2~4日
学び・達成	<ul style="list-style-type: none"> <li>急性期のイメージを持てた</li> <li>患者の不安軽減の必要性を学んだ</li> <li>カルテや現病歴から情報収集できた</li> <li>同意を得るための説明はわかりやすく行えた</li> <li>退院後の方向性に合わせた自立への援助が大切だと学んだ</li> <li>一人の患者に統一した援助を行っていくためには、カンファレンスは欠かせない</li> <li>チームとの連携が大切と知った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活背景を知ることができた</li> <li>日常生活動作と症状の関連を把握した</li> <li>洗髪は患者さんができる所はやってもらい、シャワーを持つなどの援助を行った</li> <li>理学療法や作業療法で症状を知ることができた</li> <li>ADLの回復には毎日の積み重ねが大切なのだと学んだ</li> <li>食前食後の口腔内の観察ができた</li> <li>目標の達成がほぼできた</li> <li>声かけで検査での不安が軽減される</li> <li>嚥下状態の観察ができた</li> <li>患者と家族から同意を得て援助ができた</li> <li>患者・家族との信頼関係が深まった</li> <li>援助を通してコミュニケーションを図れた</li> <li>援助によって患者との関係が深まることを学んだ</li> </ul>
困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動目標・行動計画の準備が不足だった</li> <li>病棟の構造は理解できたが、病院の構造はわからなかった</li> <li>1日の流れがあいまいだった</li> <li>打合せを自分から積極的に行えなかった</li> <li>情報収集が中心となり、患者と接する時間がほとんどとれなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>バイタルサイン測定では詳しい説明を省いてしまった</li> <li>患者から聞きたいことについてまとめず、何度も訪室してしまった</li> <li>患者2名の援助の調整が難しかった</li> <li>時間を気にして、カンファレンスでは積極的に質問できなかった</li> <li>(患者さんの状態に合わせてコミュニケーションをとるといふ)今日の行動目標は達成されなかった</li> <li>家族の面会があり足浴を実施するか迷った</li> </ul>
感じたこと		<ul style="list-style-type: none"> <li>帰るときに「また明日ね」と握手されたとき、受け入れてくれたのかなと思って嬉しかった</li> <li>洗髪後「スッキリした」と話されていたので、気分転換を図ることができた</li> <li>入浴後からとても笑顔が多くなったので気分転換を図れたと思う</li> <li>「来週また来てね」と言われ、なかなか言葉を聞きとることができない今の状態を少しでも改善したいと強く感じた</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>入院前の生活状況など不足している情報は、コミュニケーションを図りながら得ていく</li> <li>行動目標・行動計画以外にも行動内容を忘れないように記録を工夫する</li> <li>1日の流れを確認する</li> <li>自分から行動する</li> <li>記録からだけでなく病室に行ってコミュニケーションをとりたい</li> <li>患者とコミュニケーションを図りながらADLが向上するように看護援助を行っていく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活背景を今後の観察に活かしたい</li> <li>めまい、嘔気、疲労度に注意する</li> <li>聞くことをまとめて訪れるようにする</li> <li>患者さんに質問することはノートに書き、援助の目的を言えるように練習する</li> <li>毎日の少しずつの変化を見逃さないようにし、患者が安全・安楽に暮らせるように援助していきたい</li> <li>優先度を踏まえた判断力をつけたい</li> <li>症状や表情を観察し、程度や起こる場面を把握する</li> <li>来週のケアに反映させていきたい</li> <li>家族が来ていても援助を実施していきたい</li> <li>アドバイスを看護問題・目標・計画に追加・修正し来週実施していく</li> <li>達成できなかったものは次のカンファレンスの目標とする</li> <li>カンファレンスでの助言をもとに、看護計画を修正する</li> <li>援助を通して患者が心理面を打ち明けてくれるような関係を築いていきたい</li> <li>(嚥下障害の)経過を知るために、(口腔内の)観察を続ける</li> </ul>

護」を主に挙げていた。これは、総合実習の目的である「看護実践に必要な知識と技術を統合的に体験する」「科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養う」ことを学生自身が意識していた結果だと考える。一方で、目的の「自主的に学ぶ体験を通して、自己研修力を高める」は、実習課題に表現されていなかった。患者や医療スタッフという自分以外の対象を想定した課題は表現されていたが、学生自身の学習・成長のために自分が何を行うかは表現されていない。看護は対象へ働きかけるという行為を表すため、自分自身が何を行いたいかを強調しにくい側面があるかもしれない。

実習目標は記載件数の約半数が〈精神運動領域〉の内容であり、学生が総合実習において看護実践技術の向上を重点的に意識していたと考えられる。その内訳

は「コミュニケーション技術」「観察技術」「生活援助技術」「精神的援助技術」であり、多側面からの看護技術の修得を実習目標としていたことが明らかとなった。〈認知領域〉の実習目標は総数の約3割を占め、内容は「対象の理解」「疾患の理解」であった。これは、根拠となる知識を修得した上で、看護実践を行うことに関連していると考えられ、〈精神運動領域〉の目標と連動していると考えられる。一方で、〈情意領域〉の実習目標は「関係従事者との協調」「看護の新たな視点」の2件と、他領域に比べ少なかった。〈情意領域〉の目標を田島は「対人関係および自己の成長に関する内容を中心とした、態度・興味・関心・価値観(倫理を含む)・習慣などの意思や情緒に関する目標」としている。自己の実習課題と同様に、学生自身が自らを主語として自分がどのようになりたいかという目標を表

表5-2 実習の展開（実習2週目）

		5～8日	
学び・達成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体調をみながら援助の実施ができた</li> <li>・患者の不安や心配を傾聴できた</li> <li>・病気の不安や運転ができなくなるかもしれないという不安を知った</li> <li>・食事中の姿勢は声をかけ看護師が援助することがわかった</li> <li>・理学療法、作業療法の見学から介助の程度を確認できた</li> <li>・入援援助を実践できた</li> <li>・予測しながら行動し、患者が安心する援助を行うことが大切</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察項目を把握した上で、皮膚の状態の観察、食事の援助ができた</li> <li>・リハビリの後や検査後など、休憩をとり体力低下を防ぐのも援助だと学べた</li> <li>・安全な生活行動への指導ができた</li> <li>・患者の訴えを聞きとることの大切さを感じた</li> <li>・アドバイスをいかしコミュニケーション方法を工夫できた</li> <li>・考えながら援助するようにした</li> <li>・予測して動くことは患者の安全・安楽のために必要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日程を念頭に置きながら行動できた</li> <li>・他職種とチーム医療を行う一員として協力し合うことができた</li> <li>・便秘による症状の観察と腹部マッサージを説明しながら実施できた</li> <li>・患者がインスリン注射の練習時焦らず不安が軽減できるような関わりができた</li> <li>・歯ブラシの援助を説明しながら実施できた</li> <li>・見守り看護の難しさを改めて学んだ</li> <li>・家族の思っていることなど面談を通して学ぶことができた</li> <li>・傾聴することしかできなかったが、少しでも精神的ダメージを緩和できた</li> <li>・起床時間が増えるように患者さんの元で話をしたりして行動した</li> <li>・少しずつ聞き取ることのできる言葉が増え、コミュニケーションをとっていった</li> <li>・今まで以上に患者とコミュニケーションを図ることができた</li> <li>・他の患者ともたくさんコミュニケーションを図ることができた</li> <li>・前回よりも積極的に人と関わることでできた</li> </ul>
困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受持ちが2人になったので1日がとても速く感じた</li> <li>・パンフレットを使用しての患者指導はできなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察し、予測した行動が不足している</li> <li>・実習時間内に終えることができなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入浴の援助が上手くいかず、観察できないことがあった</li> <li>・患者2人のうち1人の口腔ケアを実施できなかった</li> <li>・患者の動作を観察時見守りが難しく、介助をしてしまいそうになった</li> <li>・患者の自立には、患者自身で行うことが大切だとわかっていても介助しそうになってしまう</li> </ul>
感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2週間充実した実習ができた</li> <li>・パンフレットにて指導を行い、理解してもらえた。頑張って作成して良かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エールをもらい、とても充実した実習になった</li> <li>・とても充実した実習となった</li> </ul>	
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人受け持ちでは、それぞれの検査や援助、各種訓練など時間を意識した計画・行動が必要</li> <li>・糖尿病、低血糖症状についてのパンフレットを作成する</li> <li>・（よく観察し、予測して動く技術を）残りの実習期間で身につけていきたい</li> <li>・見守り看護を実践していく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インスリン注射を患者が実施できるように援助する</li> <li>・患者2人の口腔ケア援助の時間を調整し、実践したい</li> <li>・（実習時間を超えないように）時間を見ながら守って行動していく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明日も（コミュニケーションを）同じように接していき、有効な方法か考えていきたい</li> <li>・明日1日、時間を大切に実習に臨みたい</li> <li>・明日からも予測しながら援助していきたい</li> <li>・（食事姿勢と誤嚥を関連づけて）説明したときも納得したような反応があり、継続して患者が実施出来たらよい</li> <li>・今後も積極的に人と関わっていききたい</li> <li>・問いかけ方などコミュニケーションを工夫する</li> </ul>

現することができていなかったと考える。

到達目標は実習目標に照らし、より具体的な内容を示すことができていた。〈認知領域〉では「対象理解」「症状を関連付けたアセスメント」「症状の日常生活への影響」、〈精神情意領域〉では「日常生活・治療上の援助技術」を挙げ、看護の実践や看護過程の展開において達成度を評価しやすい目標を掲げて実習に臨んでいたと考える。〈情意領域〉の到達目標には「患者や家族への配慮」を挙げていることから、看護援助を念頭に置いていたと考える。到達目標にも学生自身を主語とした目標の表現がなかったため、自己教育力の育成を考慮し、実習前の準備で、「学習者」としての姿勢や取り組みを視野に入れやすい指導が必要と考える。

## 2. 実習の展開

実習中、実習記録に振り返りの欄を設け、毎日の経験を言語的に表現していた。記載内容には〈学び・達

成〉〈困難〉〈感じたこと〉〈課題〉が含まれていた。

看護の展開では〈学び・達成〉の記載件数が最も多く、学生は実習を通しての経験を肯定的にとらえていた。実習1週目に比べ、実習2週目に〈学び・達成〉の件数が増えており、実習が経過するにつれて自己の成長を自覚していると考えられた。〈困難〉として、患者とのコミュニケーションや学生自身の学習準備・積極性の不足、時間を念頭に置いた援助調整と見守ることの難しさを挙げていた。総合実習では実習調整も学生自身が行うため、初めて患者の援助や指導者・仲間との調整も自分で行っている。実習前の準備から、主体的に実習調整を行うことは強調しているが、改めて学習者としての姿勢を振り返っていた。看護の展開をしながら、主体的な学習者として人と関わる上での態度や配慮・協調性を意識していたと考える。〈感じたこと〉は全体の中での記載量は少ないが、実習1週目では患

表6-1 実習後の学び

領域	内容項目	件数
<b>■認知領域</b>		3
	・個別看護の明確化	2
	・障害受容過程	1
<b>■情意領域</b>		20
	・他職種との連携・共同	3
	・十分な説明と傾聴	3
	・積極性	3
	・自己開示と患者-看護師信頼関係	2
	・自分の考えを述べること	2
	・感謝の気持ち	2
	・院内での連携, 情報伝達	1
	・援助の時間配分	1
	・看護師として働くイメージ	1
	・笑顔の重要性	1
	・学生同士の協力	1
<b>■精神運動領域</b>		10
	・個性を踏まえた観察と看護実践	4
	・生活背景を踏まえた看護実践	1
	・援助実践と評価の時期	1
	・指導媒体を用いる意味	1
	・意思疎通の実戦	1
	・コミュニケーションの重要性	1
	・自立へ向けた教育的指導	1

者の言葉や反応から看護学生としての喜びが表現されていた。学生自身が自らを援助者と自覚し、且つ患者が自分への援助者であることを実感する場面となっていた。実習2週目は、8日目のみの記載だったが、学生全員が充実感を挙げていたことから、実習を成功体験として自覚できていたと推察された。〈課題〉は〈学び・達成〉に次いで件数が多かった。実習1週目の方が2週目より件数が多く、実習に臨む態度や姿勢、受け持ち患者の観察・コミュニケーションを挙げていることから、対象者やスタッフとの関係構築が実習1週目の課題の特徴といえる。実習2週目には時間を念頭に置いた援助調整や援助の実践に焦点が向けられていた。

実習記録には振り返りの欄とは別に看護過程に関する記載欄を設けていたため、振り返りには患者が主語となる内容ではなく、学生自身が主体としての経験のみが表現されていたと言える。橋本は自己評価を「自分で自分の学業、行動、性格、態度等を評価し、それによって得た情報に基づき自己を確認し、自分の今後の学習や行動を改善するという一連の行動である」(橋本, 1983)としている。また、鈴木は自己評価を「自分の仕事の成果、プロセスや成長を俯瞰し、大切なボ

表6-2 今後の課題

領域	内容項目	件数
<b>■認知領域</b>		2
	・培った観察力で相手の表情や行動で判断する	1
	・予測して行動する	1
<b>■情意領域</b>		4
	・患者について他職種と情報共有, 連携していくチーム医療について学ぶ	1
	・友人(仲間)に相談し助け合う	1
	・積極的に声をかける	1
	・積極的に発言し相手にわかるように詳しく意見を言う	1
<b>■精神運動領域</b>		3
	・優先順位を瞬時に判断し, 限られた時間内で最善の援助の実践	1
	・効果の評価を見据えた教育的援助の実施	1
	・患者の意思を確認した上での安全な援助の提供	1

イントや自分の変化を見出すこと」としている(鈴木, 2006)。振り返りでは、〈学び・達成〉〈困難〉〈感じたこと〉を〈課題〉に結び付けており、学生自身が記録するという行為を通して自分を俯瞰し、自己の成長を含めた自己評価を行っていたと考える。

### 3. 実習のまとめ

実習終了後の「実習レポート」の学びには〈情意領域〉の項目が全体の半数以上を占め、次に〈精神運動領域〉の項目が多かった。「実習計画書」に挙げられた実習目標と到達目標は、〈情意領域〉の項目が最も少なかったことに相反する結果となった。高梨は「体験のことは化が See One→Do One→Teach One の環のなかで展開されたならば当然、『体験・経験の共有の場』が形成され、その場のなかで継続教育(自己教育)力と実践知力はより顕在化されてくる。しかもその顕在化は段階ごとに質的変容を遂げていく」(高梨, 2009)と述べている。自己の体験を振り返りとして記載しながら看護を実践し、実習期間最終日の学内グループワークで他学生と経験を共有するという一連の過程は高梨のいう「体験のことは化」と言える。「体験のことは化」がなされた結果、実習終了後の学びは自己の成長に関する内容を中心とした〈情意領域〉〈精神運動領域〉に焦点化されたと考える。

今後の課題には、総合実習の経験を土台とした、自らの姿勢や援助実践能力を挙げていた。学生にとって



総合実習は、インターンシップ等の学外の活動を除けば看護基礎教育における最後の臨地実習となる。つまり総合実習を経て表現された課題は、看護師資格を有した後の看護職者としての継続教育における課題とも言える。田島は「継続教育は基礎教育の土台に行うものであり、基礎教育が不十分な状態での継続教育は機能しない」(田島, 2009)と述べている。学生自身が看護基礎教育終了時に実践への課題を持って看護職者となることは、教育と臨床の解離が減り、且つ基礎教育で学んだ内容をより深化・発展させることにつながると考える。

#### 4. 今後の指導のあり方

実習前の準備の結果から、学生は総合実習における自己の課題・目標を明確化できていた。しかし、学生自身の態度・興味・関心・価値観・習慣といった対人関係や自己の成長に関する〈情意領域〉の目標が表現できていないことがわかった。対照的に、実習の展開・実習のまとめでは、実習の経験を記録へ表現し、自己の成長を含めた自己評価をしていることがわかった。これらの結果から、自分で学び、成長、発展してゆける力である自己教育力を培うためには、今後は実習の展開・実習のまとめと同様に実習前の準備においても、自己の成長を評価できる指導が必要である。そのためには、まず実習前の準備における学生の〈情意領域〉に関する課題や目標を明確化し、実習課題や実習目標・到達目標として積極的に表現できる指導が必要である。そして、実習前の準備を通して行われる面接やグループワークでの経験を記録上で振り返り、準備過程の自己の成長も評価できる指導が必要である。

#### 研究の限界

本研究は対象者が4名であるため、一般化は困難である。また、学生の学びはレポートへ記載された内容をデータとして用いているため、その程度や関連性については明らかにできなかった。しかし、学生が自覚した学びの視点は教育的指導上の手がかりとなると考える。一般化するためには、対象者を増やすことや自己教育力尺度といった尺度を用いることで、関連性を明らかにする必要がある。

## 結 論

1. 自己の実習課題は、学生のこれまでの経験を背景として「看護実践能力」「対象理解(身体・心理・社会)」「自身が関心のある健康状態への看護」を挙げていた。
2. 実習目標は、多側面における看護技術の修得を挙げていた。到達目標は、実習目標に対応し、達成度を評価しやすい具体的な目標を挙げていた。
3. 実習の展開は、学生自身が主体としての経験を〈学び・達成〉〈困難〉〈感じたこと〉から〈課題〉に結び付け、自身の成長を含めた自己評価を行っていた。
4. 実習のまとめでは、学びが〈情意領域〉〈精神運動領域〉に焦点化され、総合実習の経験を土台とした自己の成長を自覚していた。
5. 今後は、実習前の準備から〈情意領域〉の実習課題・目標を明確にする指導と、準備過程の自己の成長を振り返り、自己評価していく指導が必要である。

## 引 用 文 献

- 1) 橋本重治(1983). 指導と評価「教育評価基本用語解説」, 日本教育評価研究会誌臨時増刊号, 38
- 2) 梶田叡一(1985). 自己教育への教育, 明治図書, 36-53
- 3) Knowles, M.S.(1984), The Adult Learner: A Neglected Species 3<sup>rd</sup> ed, Gulf Publishing, 51-61
- 4) 厚生労働省医政局看護課(2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, [www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf) (2009/12アクセス)
- 5) 杉森みど里, 舟島なをみ(2004). 看護教育学(第4版), 医学書院, 249-256
- 6) 前掲書 5), 50-62
- 7) 前掲書 5), 184-200
- 8) 鈴木敏恵(2006). 目標管理はポートフォリオで成功する, メヂカルフレンド社, 20-47
- 9) 高梨俊毅(2009). 看護医療系職の「高度専門職化」への道継続教育と看護の実践知 KIERA(学会)活動20年の足跡を辿る, 看護の化学社, 30-39
- 10) 田島桂子(2009). 看護学教育評価の基礎と実際(第2版) 看護実践能力育成の充実に向けて, 医学書院, 111-124

**THE LEARNING OF STUDENT EDUCATION IN THE ADULT  
NURSING STAGE OF COMPREHENSIVE NURSING**  
**—BASED ON A REPORT SUBMITTED BY TRAINEES THAT DETAILED  
THEIR PREPARATION, TRAINING, AND SYNOPSIS—**

Shizuko OSANAI<sup>1)</sup>, Chiyo MURATA<sup>1)</sup>

**Abstract:** The purpose of this study is to report the findings of 4 students who underwent the adult nursing stage of comprehensive nursing practice, and take into consideration future methods of instruction. The results were as follows: (1) Students increased their own background knowledge and experience “practical nursing ability” “emphasis (understanding of the body, of psychology, and of society)” “health concerns in the each area of interest”. The objective of comprehensive nursing practice is to acquire nursing skills that would be used in various situations. The objective was made specific and easy to assess. (2) During practical training, students experienced feelings of both acquisition and accomplishment, as well as those of difficulty. Students evaluated their own growth during the training. (3) From the summary section of the reports, student learning was concentrated in the affective domain and psychomotor domain, and completion of this training led to personal growth. (4) In the future, it is necessary to clarify goals and incorporate self-evaluation during the preparation stages of practical training.

**Key words :** comprehensive nursing practice, basic nursing education, self-educational ability, self-evaluation

---

1) Faculty of Nursing Hirosaki Gakuin University  
TEL: 0172-31-7127, FAX: 0172-31-7101, E-mail: s.osanai@hirogaku-u.ac.jp